

日本の温泉医学、 その新時代への起点を 古書から見つける

NPO法人健康と温泉フォーラム 常任理事 合田純人

『ベルツの日記』と 『日本鉱泉論』

私がこの二冊の本を知ったのは、故大島良雄先生の紹介だった。明治13年発行の『日本鉱泉論』と、その著者である明治の医学者の日記として、『ベ

ルツの日記』をぜひ読むようにと紹介された。当時、温泉のことを何も知らなかった私は、後者が日本の温泉の素晴らしさとその医療や保養への社会的活用を説いた貴重な本だと聞き、本棚から小さな文庫本を手に取りさせていた。

故大島良雄先生は明治44年に札幌で

生まれ、名付け親はあの「武士道」の著者、新渡戸稲造である。昭和9年東京大学医学部卒業後、医学部教授として、信州大学、岡山大学、東京大学など各地で教鞭をとられた。また温泉やリウマチ、アレルギー、東洋医学などの学会の会長をされながら、東京大学名誉教授、埼玉医科大学名誉病院長な

どを歴任され、後に私が所属する特定非営利活動法人健康と温泉フォーラムの初代会長及び名誉会長として活躍、平成17年1月に亡くなるまで日本の温泉医学の伝統を大切に守り、また人間としても誠に魅力ある偉大な日本人であり、そして医学者であった。先生と初めて練馬のご自宅でお会いしたのが



合田純人(ごうた じゅんひと)
1949年、香川県生まれ。1986年設立の健康と温泉フォーラムの創立メンバーの一人で、世界保健機関(WHO)と公式関係を持つ国際温泉気候連合のアジア・太平洋協議会(FAPAC)初代事務局長を長年兼務。国内のみならずアジア・太平洋地域の温泉の社会化、疾病予防や保健的利用の普及・啓蒙に携わり、積極的に温泉のグローバル化を進めている。国内では自治体の委員など歴任。温泉地の広域連携や産官学の立体的な研究プラットフォームづくりや、温泉療養の医療費控除などの政策提言、温泉関連人材の育成に力を注いでいる。専門は健康社会学
主な著書「Thermalism in Japan」(1988年)「日本の名湯百選」(1990年)「新湯治のすすめ」(2009年)「放射能泉の安全に関するガイドブック」(共著)(2012年)「温泉からの思考」(共著)(2012年)、「温泉実務必携」(共著)(2016年)等

昭和60年で、その年が、結果的に私の温泉元年となり、以降30数年、平成が終わり、新たな年号で温泉新時代を迎



『ベルツの日記』
トクベツ編 菅沼竜太郎訳 岩波書店
1979年(初版は1939年)



『日本鉱泉論』
ベルツ、中央衛生会、1880年
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

えようとしている。大量生産、消費がもてはやされた高度成長時代の日本では、温泉も消費財とされるようになった。明治以降150年、日本が近代国家へと邁進した中で、日本人と温泉の見せる景色がどのように変遷したのか、日本の近代医療の進化の中で、いかに日本の伝統と、その心、そして温泉医学が埋没していったのか、温泉に限らず、この古書の意味する急激な近代化とその価値観の変遷による日本人の混乱、その社会的世相を知ると、第二次世界大戦後の日本の社会変遷など、茶飲み話に見えてくる。何気ない日常の日記に隠されたベルツの洞察力は、日本人が置き忘れてきた「何か」を気付かせてくれる。その「何か」について一緒に考えてみよう。

もしも草津がヨーロッパにあつたとしたら

明治政府は近代国家を目指して、急激な近代化を図った。西欧列強から基本のインフラである社会制度やシステムを学び、模倣するため、様々な分野で外国人教師を招聘した。医学教育に

おいては、長崎から蘭学がもたらされていた幕末頃から維新を経てもつぱらイギリスを模倣しようとした。しかし徐々に幕府の「医学所」から「医学校」への変遷を経て、イギリス医学の臨床医学教育から、学理・研究を重視する医学へと移り変わり、ドイツの医科大学をモデルとした組織改革が進んだ。そのような背景の中、ドイツから新進気鋭の近代医学の教師として、招聘された医師の一人であり、東京大学医学部の元となった東京医学校の内科教授に明治9年に就任したのがその人、エルウィン・フォン・ベルツ博士である。当時弱冠27歳の青年医師であつたベルツ博士は52歳で東京医学校(後の東京大学医学部)を退官するまでの約25年間、我が国の特異な水田作業での寄生虫病や風土病の研究とともに、もともと鉱泉(温泉)の持つ疾病予防、予防医学的な研究に興味があつたようで、火山国である日本特有の強酸性泉などに間近に出会つてから日本の温泉の優れた医療や保養効果を主な研究対象とした。東京で政界や皇族または企業のお抱え医師として活躍すると同時に、草津温泉や有馬温泉、伊香保温泉を始め日本全国の温泉地を訪れ、その体験

や治験を明治13年に『日本鉱泉論』(中央衛生会)としてまとめた。特に、その中で草津温泉に関して「草津には、無比の温泉以外に、日本でも最良の山の空気と、全く理想的な飲料水がある。こんな土地が、もしヨーロッパにあつたとしたら、カルスバード(現在のチエコに位置し、当時のヨーロッパ一の温泉保養地)よりもにぎわうことだろう。『ベルツの日記』(岩波文庫版より)」と書いている。この文章は温泉関係者では知らない人はいない。時間湯(高温浴)など当時の日本の温泉文化の背景となつた仏教や山岳信仰の伝統的な風習などに興味をそられたに違いない。いたく草津温泉が気に入つたベルツ博士は、その優れた高原的保養環境、気候的環境を活かし、世界的な温泉保養地に欠かせない、温泉医学研究所や療養施設を建設するように自らの患者だつた高官や企業家を通じて、当時の政府に進言するだけでなく、草津温泉の泉源の権利や、温泉街からこし登つた、高原地区の広大な土地を自費で購入したりした。しかし、地縁のない外国人がいくら旗を振つても、地元の特に保守的な地主や温泉旅館の経営者が反対し、実現は叶わなかつた。

結果的に、ベルツの構想に理解を示して温泉保養地の計画の見直しが始まったのは、ベルツ博士がドイツに帰国する直前だったという。このあたりの生々しい話を、代々、草津温泉の地主で町長などしていた家系で、学生を連れて温泉療養の実習のため、たびたび草津温泉に滞留した故大島良雄先生の無二の親友である故中沢兆三氏に直接おうかがいしたことがあった。中沢氏の祖父が当初、強固に反対したのだという。だが、改めて、ベルツの理想を実現しようと、高原にホテルや日本初のペンションを建てたり、温泉研究所を自費で運営したり、ベルツの理想を実現しようとした。もうひとりの明治生まれの日本人がいたのだ。

伝統的温泉療法が 消滅しようとしている

ベルツ博士の意志を引き継いだのは、草津温泉の故中沢兆三氏だけではない。昭和元（1926）年、東京帝國大学医学部に温泉気候物理医学を研究する内科物理療法学講座が創設され、ベルツ博士の温泉医学研究を引き継ぐことになるのだが、これが我が国の

立大学における温泉医学研究を柱の一つとする近代講座の始まりで、講座主任には、ベルツ博士の出身国ドイツで温泉医学、放射線医学を研鑽してきた真鍋嘉一郎教授が就任した。その後、三沢敬義教授そして大島良雄先生と引き継がれたが、残念なことに1998年、内科再編成に伴い、アレルギー・リウマチ内科となつて、同講座は消滅し、今日に至っている。

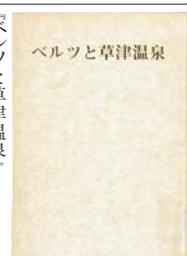
北海道大学、九州大学、群馬大学、岡山大学ほか全国の温泉地にあった大学附属温泉研究所も次々閉鎖され、今日では日本の伝統的温泉療法が大学医学教育の臨床医学から忘れ去れようとしている。ベルツ博士の蒔いた日本の温泉医学の伝統が消滅しようとしている。その主な原因として考えられるのは、明治政府の新しい近代的医療制度である「医制」での伝統医学の切り捨て政策だった。日本の近代化を進めるにあたり、それまで伝染病などが迷信や信仰などの対象となっていた



1891年
（明治24）夏、
草津を訪れた
ベルツ博士左端。
一井旅館
（現ホテル一井）にて
所蔵・ホテル一井

こと、また、薬草や漢方、温泉や禊水行など日本の伝統的なものを全面否定し、西洋医学としてもたらされた知識とそのシステムのみ国家が認める医学として手厚く育成することになった

ことである。残念なことに、自然に寄り添う日本の伝統や風習、貝原益軒の『養生訓』などの優れた教えなど、日本人を支えた精神文化まで否定され、それまで日本の伝統を守ってきた知識



『ベルツと草津温泉』
市川善三郎、あさを社、
1980年



『新版日本の温泉地
その発達・現状とあり方』
山村順次、日本温泉協会、
1998年



『ベルツ日本文化論集』
エルヴィン・ベルツ、東海大学出版会、
2001年



『古書に見る温泉』
私の温泉史ノート抄
野口冬人、現代旅行研究所
2004年

人（テクノクラート）と呼ばれる人たちがまさに180度の大転換をすることで社会的地位を保証され、生き残るような有様だったようだ。そのことに関して、ベルツ博士が次のように記している。（文語体はわかりづらいので、筆者が一部省略して口語体で翻訳している）

「日本人は、幕末から維新とわずか10年前にあった封建制度時代から、（いってみれば中世騎士時代の文化状態にあったのが）、数百年の時代を一挙に飛び越えて、19世紀に飛び乗って全ての知識や科学的成果を即座に自分のものにしてしまっている。」

「そして、近代ヨーロッパが培ってきた知識や文化を教えるために招聘された我々は、日本人をこき下ろし、あるいは、日本を賞賛するだけでなく、その無知にさえおべっかを使っている。外国人教師の使命を見直すべき人たちが多いのは残念である」

「我々だけでなく日本人にも不敬な人々が多くいることは残念である。西欧人には考えられないことなのだ」

が、日本人は自分自身の過去に持っていた知識を全否定し、そのことを信念として重ねてきた知見や理論については何も思い出したくない。それどころか、教養人たちはそれを恥じてさえいる。『いや、何もかもすべて野蛮でした』、『我々には歴史はありません。我々の歴史は今、始まるのです』という知識人さえいる。」

「このような事は急激な変化・変質に対することに関して、自然な反発から起こり得ることとは理解できるが、正直、大変不快な感情が湧いてくる。日本人たちが自分の培ってきた文化や環境を自己否定し、軽視すればするほど、かえって私達の信頼や理解を得ることはできない。特に今の日本にとって必要不可欠なのは日本文化を持つすべての貴重で大切なものは何かを検証し、それを現在と将来をつなぐ大切なものとして大切に育て、ことさらにゆつくりと慎重に適応させていくことなのだ。」

改めて明治150年にあたる2018年、温泉医学は西欧や日本でも大きな転換期を迎えている。ドイツでは自

然医学（森林浴、海浜や山岳地での気候療法、温泉療法、漢方治療、マッサージなどの物理療法）が近代医学と併用されているが、医療費などの高騰で、温泉療養への社会保障費が削減され、また従来の温泉療養の適応症に優れた新薬が開発され、温泉医学の活躍する伝統的な保養地が療養地から休養地もしくは観光地へと大きな転身を図っているのが現状である。

このようにクア（療養）からウエルネス（健康増進）へ移行したヨーロッパではその次の世界「ポスト・ウエルネス」を見据え、自然と一体化し、心身（心と体）、ソウル（魂）再生の装置としての伝統を持つ日本の温泉地とその文化が世界的に熱い注目を浴びている。日本の温泉の真価が試されようとしている今、温泉医療の近代化への示唆のみならず、確固たる伝統と文化及び信念を失うことの危うさを指摘している『ベルツの日記』は、上下2冊の薄い文庫本だが、私にとっては故大島良雄先生が貫いた信念と人としての生き方を改めて思い出し、「日本人が置き忘れてきた大切な何か」を考える大切な古書となっている。

参考文献



「温泉からの思考」温泉文化と地域の再生のために」合田純人 森繁哉、新泉社、2011年



「写真記録 日本温泉」写真記録刊行会編 日本ブックエース、2012年



「日本温泉誌」(上巻) 内務省衛生局編、報行社、1886年



「日本温泉大鑑」日本温泉協會編、博文館、1941年



「温泉案内」鉄道省、鉄道省、1931年